

小説 あらおし 悠
挿絵 瀬奈茅冬*



百合グラドル
優衣&詩歩

密着ラブショット

立ち読み版

第一章 見ちゃった!? グラドルのスキャンダル!

第二章 見られちゃった!? グラドルのスキャンダル

第三章 もう一度、撮って

第四章 教えてください、女の子同士のこと

第五章 もらってください、わたしの全部

エピローグ 優衣と詩歩とみんなとで、スキヤンダラスな関係に

登場人物紹介

Characters



まいはら ゆい 舞原優衣

Gカップグラビアアイドル。
最近は人気も安定、写真集も数々出している。絢・遊希・愛莉3人と恋人関係にある。



ひさみ しほ 久美詩歩

優衣に憧れている新人グラドル。芸能活動と共に女子校生としての日々を送っている。スカウトで業界入り。



みなせあや 水無瀬絢

優衣と愛莉を担当するマネージャー。厳しい一面を覗かせつつも、職場を離れると優衣と親密関係に。



はやまゆうき 葉山遊希

優衣の先輩グラドル。アイドルを撮影するカメラマンとしても活躍している。



あいり 愛莉

優衣の後輩グラドル。優衣とはツーショット写真集を出したこともある関係。

第二章 見られちゃった!? グラドルのスキヤンダル

「や……あつ、愛莉あいりちゃ……だめつ、あんツ!!」

ぴちゃぴちゃと、脚の間から卑猥な粘着音が絶え間なく響く。身体の中で生まれる鮮烈な痺れに耐えきれず、優衣は激しく身体をくねらせる。

「んふふつ……優衣先輩ったら。ここ、こーんなにトロトロにして、何が駄目なの？」

年下とは思えない淫靡な笑みを浮かべ、愛莉が股間から顔を上げた。小柄で細い肢体に黒髪のツインテールは、彼女を實際より幼く見せる。けれど、その挑発的な吊り目に射い竦すくめられると、被虐的な悦びに、胸と、そしてお腹の奥が熱く疼いてしまう。

「ね、ねえ。もうすぐ絢あやさんも帰ってくるし、こんなこと……ふあつ!! そ、そこだめ……あッ、あああんっ!」

「あはあ……優衣先輩のここ、おいしい……ちゅ、ちゅる、ちゅばっ」

「あうん! あ、愛莉ちゃん……だ……めえええ……っ」

弱々しい抗議なんて意に介さず、愛莉の手は、優衣の太腿を大きく押し広げた。恥裂をざらつく舌で舐め上げられて、裸の腰が何度も跳ね上がる。下半身だけじゃない。ベッドに横たわる優衣の身体を覆うものは何ひとつなく、頭の上に掲げた両手首は、オモチャの

手錠で拘束されている。

「ね、愛莉ちゃん……。これ……。手錠、きついよ。お願い、外して……」

「だーめ。だつて、困り顔の先輩、可愛いんだもん」

「そ、そんなあ……」

こちらは全裸なのに、愛莉は一枚も脱いでない。Tシャツとデニムのホットパンツというボーイッシュなスタイルは、彼女に似合つて確かに可愛いけれど、着衣の格差が羞恥をことさらに煽り立てる。もちろん、それも愛莉の狙いのうち。彼女は優衣を困らせるのが大好きだった。そうと分かっているのに、彼女の望む痴態を見せてしまう。

「あはあ……。また濡れてきた。先輩、ほんとーにエッチだなあ」

「そ、そんなこと言わないで……。ああつ！　そこ舐めちゃ……。ひいっ!!」

意地悪な舌が、脛口の縁でくるくると円を描く。甘い痺れに苛まれ、堪らず優衣は彼女の頭を太腿で挟み込んだ。

「やあ……。やああん。き……。気持ち、いい……」

快感を告げる優衣に、愛莉が笑みを浮かべる。彼女は一旦身を起こし、愛液を貼りつけた唇でキスを求めてきた。それに抗う気持ちなんて、優衣にあるはずがない。うっとり目を閉じて、自分から彼女の唇を迎えに行った。

「はあ……。優衣先輩……。大好き……。ちゅ、ちゅるっ」

「ん……。愛莉ちゃ……。ん、むっ……。ぶあああ……」

互いにくねくねと首をくねらせ、唇を深く密着させる。唾液を纏った愛莉の舌が、口腔内に押し入ってくる。優衣は自らも舌を伸ばし、痺れるような悦びでそれを歓迎した。
(ええっと……あたし、どうしてこんなことになってるんだっけ……)

キスの快感に身悶えし、お尻の下でベッドのシーツがくしゃくしゃになる。あまりに気持ちよくて忘れかけているけど、このベッドは優衣のじゃない。そもそも、エッチな行為に耽っているこの家自体、優衣のものでも愛莉のものでもない。

優衣のマネージャーの、水無瀬絢の自宅だった。

明日のPV撮影は遠方なので、今夜はここに泊まり、明日の朝、一緒に出発することになっていた。しかし絢はまだ仕事が残っているというので、鍵を借りて、先にお邪魔していたのだけれど、どこかでそれを聞きつけた愛莉が乱入。あつという間に押し倒され、家主の留守中にこの有様。

愛莉は優衣の唇を吸いながら、Gカップのバストを掌で包むように捏ね回す。

「ン、あ……あふ、ンんっ……」

「先輩、我慢しなくてもいいんだよ？ 思いつきり、可愛い声を聞かせて」

「で、でもでも……んきゅふうッ！」

声を催促するように、硬く屹立した敏感乳首を抓られた。堪えようとした喘ぎが、変な悲鳴になって喉から絞り出される。住宅地とはいえ、絢宅は普通の一戸建て。ご近所に聞き咎められる心配はないだろうけれど、恥ずかしいものは恥ずかしい。羞恥で流す優衣の

涙を、愛莉は愛おしそうに舐め取った。そして、うっとり唇を重ねてくる。

「先輩、好き……」

彼女は——愛莉は、同じ事務所に所属するグラビアアイドル。一年後輩で、そして、優衣の「三人目」の恋人。

（ていうか……同時に三人と付き合ってるって、それだけでも変なのに……）

その全員が女の人なのだから、自分でも普通でないのは分かっている。それに優衣も愛莉も、本来は男性の目を楽しませるのがお仕事。なのに女の子同士で快感を求め合う仲間になって、どうしてこんな境遇にと、時々思わないでもない。

けれど、大好きな人たちに愛される幸せの前では、そんな疑問なんて些細なこと。最初は戸惑いを覚えた女の子同士の気持ちよさも、今は自分から求めずにいられない。

「先輩……脚、開いて……」

キスで興奮したのか、愛莉の瞳も欲情で濡れている。優衣は年下の少女に命じられるまま、膝を立てるようにして腰を持ち上げた。

「あは……先輩、いやらしい格好……」

愛莉は嬉しそうに舌舐めずりし、再び優衣の女性器に口づけようとした。キスの気配を感じ取り、陰唇の恥褻が快感への期待で疼き出す。それなのに——。

「……あ、携帯鳴ってる」

愛莉は、不意に優衣から離れてしまった。完全に愛撫を受け入れる態勢になっていた身

体は、突然の放置に耐えられない。

「ま、待って愛莉ちゃん！ あたし……あたし……あたし……」

股間の切ない疼きで涙目になる優衣を、嗜虐的しごやくてきな笑みで愛莉が見下ろす。

「だーめ。大事な用かもしれないでしょ。先輩って、ほーんとエッチな子なんだから♪」

「そ、そういうつもりじゃ……」

反論の途中で口をつぐむ。愛撫のおねだり以外に、彼女を引き止める理由があるはずもない。年下の後輩少女に劣情を見透かされ、優衣は身体を恥辱の朱に染めた。

「心配しなくても、電話が終わったらちちゃんと可愛がってあげます」

頬に軽くキスされて、少しだけ心が安らぐ。飼い馴らされたペットみたいで自分が情けなくなるけど、彼女に苛められたいのが偽らざる本音なのだから、仕方がない。

でも、携帯に出た愛莉の様子は、少し変だった。

「ああ、遊希さん。こんな時間にどうし……は？ え!? ちょ、何よそれ……!!」

大声を上げたと思ったら、急に声を潜めた。優衣に背を向け、でも、こちらを横目でチラ窺っているようにも見える。

「遊希さんから？ なにかあったの？」

首を傾げながら上半身を起こす。重大事なら、こんなことをしている場合じゃない。

「あー大丈夫です。ええつと……なーんか、遊希さんがポカやっちゃったみたいなんですけどお……心配いりませんから、優衣先輩はそこで待っててくださいいっ」

「このままって言われても……あ、愛莉ちゃん！」

身動きできない優衣を置き去りにして、愛莉は隣の部屋に駆け込んでしまう。

「……どうしたんだろ」

彼女の声も顔色も普通じゃなかった。明らかに何かをごまかしている。それを分かっているながら、優衣は途方に暮れるしかなかった。全裸で、しかも両手を拘束された状態で放置されたら、確かに黙って待っている以外に術はない。

でも、そんなに待つ必要はなかった。程なく、この家主が帰ってきてくれたから。

「ただいま。優衣、待たせちゃったわね。もう夕食は済ませ……何をしているの？」

マネージャーの水無瀬絢が、全裸で待機中の優衣に冷静な視線を向ける。

セミロングの髪をバレッタでアップにし、濃紺のスーツ姿は、まるで絵に描いたようなキャリアウーマン。もちろん格好だけでなく、仕事ぶりも超優秀。ただ、目つきが鋭くて無愛想なので、彼女のことを怖いと思っている人も少なくない。

（優しい人なのになあ……）

感情表現が果てしなく不器用なだけなのに。ただ、その点については優衣も似たようなもの。自分の思いを説明するのが苦手なせいで、お互いの気持ちが擦れ違い、傷つけ合ったこともあった。けれど、それも過去の話。

だって、今は、彼女こそが優衣の「一人目」なのだから。

「えっと……あ。絢さん、おかえりなさい……」

しかしいくら大好きな恋人でも、こんな格好でのお出迎えは、さすがにちよつと、はしたない。せめて核心部分は隠そうと、内腿を擦り合わせるように閉じてみる。

「あ……あのね絢さん、これは……」

「分かってるわ。さつき愛莉の声が聞こえたから。まったく仕方のない娘ね。私の家はラブホテルじゃないのよ」

上着とタイトスカートを脱ぎながら愚痴る絢。着替えるのかと思つてぼんやり眺めていたら、彼女はブラウスのボタンを外すのもどかしげに、優衣に申し掛かってきた。

「あ……絢さ……んむっ!」

唇を塞がれると同時に、舌が彼女の口腔へ吸い込まれる。ただでさえ手錠で自由を奪われている手首を、さらに両手で押さえつけ、優衣の唇と舌を貪るように吸引する。

「ん、あむっ……絢さん、こんな急に……ふみゅっ!」

「何を言ってるの、優衣。こんなに脚をモジモジさせて……我慢できないんでしょ?」
「え、あ……!! そ、それは違っ……きゅふうん!!」

絢の太腿が、優衣の脚の間に割り込んだ。ストッキングのザラザラで淫核を擦り上げられ、堪らず腰が跳ね上がる。裸でいるのを取り繕おうとした動きを、欲求不満と誤解されたいだ。でも股間を走る強烈な快感に、それが彼女の勘違いでないことを教えられる。

「あう……ん、はああう! あやつ……絢さん……くふッ……んッ!」

「可愛い……可愛いわ、私の優衣……」

甲高い優衣の喘ぎに触発されて、絢のキスも激しくなった。唇に舌を咥え込み、それを軸にして顔を捻じり込んでくる。まるで舌の表面をこそぎ取るような、激しいピストン運動。ふたり分の唾液が混じり合う快感に、全身の肌がぶつぶつ粟立つ。

「あぶ……ん……ンむあ！ むううう……!!」

「はあ……優衣……ン、ぷあああつむ！」

振れるほどに唇を押しつけ、溢れる唾液を啜る絢。普段は知的な彼女なのに、セックスとなると、まるで動物のように野性的。貪るように快感を求める。そのギャップが優衣には堪らない。彼女に激しく求められるのが嬉しくて、お腹の奥が蕩けそうに熱くなる。

「絢さん、絢さん……。あぶ……ん、ンふあ……あぶ……っ」

口の中に唾液を流し込まれて、窒息しそうだ。同時に優衣の下半身では、ストッキングによる淫摩擦で淫裂がだらしなく涎を垂らす。腰が勝手に動き出し、自分から彼女の脚に股間を擦りつけてしまう。

「はあ……。そんなに腰をふっちゃって……。いやらしい娘……。ご覧なさい。私のストッキングがベタベタだわ。相変わらずアイドルとしての自覚が足りないわね」

絢が身体を引くと、彼女の腿の真ん中あたりに、べつとりと楕円の染みができていた。自分が溢れさせたものの多さに、羞恥で身体が竦んでしまう。

「ご、ごめんなさい。でも……。でも……。でも……!!」

「言い訳なんて聞きたくないわ。……お仕置きよ」

こんな感じさせたのは絢なのに。でも、そんな反論が通じるはずもない。彼女は再び優衣の股間に脚を当てると、身をかがめて乳首に噛みついた。

「ひ……ッ!!」

もちろん、絢が優衣を傷つけることなんて絶対ない。ただの甘噛み。それでも、乳首に歯が食い込む感覚は、拘束された身体を異様に昂ぶらせた。さつき呆れられたばかりなのに、淫裂から濃厚な恥蜜をダラダラ流す。歡喜の悲鳴が裏返る。

「ダメ！ 絢さん……噛んじやダメえええ……!!」

「ダメじゃないでしょ。こんなにお股を濡らして行くせに。本当のことを言いなさい」

表情は冷静だけど、絢の言葉も上擦って、額は汗ばんでいる。瞳を欲情で妖しく輝かせながら、今度は頸動脈に噛みついた。同時に、熱く湿った秘裂の奥へ、彼女の指が一本、押し込まれる。

「あああッ!!」

十分すぎるほど濡れていたせいか、絢は助走なしで手首を動かし始めた。素早い抽送運動で、膣内の濡れ肉を擦り上げる。

「ひっ、あっ……あう、ああああん!!」

身体の内側から生じた甘美な痺れに、優衣は顎を仰け反らせた。腰が浮き、お腹が大きく卑猥に波打つ。

「どう優衣。気持ちいい?」

「絢さん！ ……いい……き、気持ちいい……よおお……ッ！」

切れ切れの優衣の喘ぎに満足し、絢の舌先が首筋を逆撫でした。それだけでも敏感になつた肌には過剰な刺激。全身が総毛立つような快感に包まれて「ひいッ！」と甲高い悲鳴を上げてしまった。その声に触発されて、絢の指が淫裂を激しく掻き回す。聞くに堪えない卑猥な水音で、優衣の耳を苛めてくる。

「凄いわ……どんどん溢れてくる……。ほら聞こえる？ 優衣のエッチな音…。」

「やあああん！ そ、そんな音聞かせないで……意地悪、しないでええ……！」

言葉とは裏腹に、身体が熱い。絢の愛撫に合わせてお尻で円を描き、自分から指に膣肉を擦りつけてしまう。

「絢さん！ あたし……熱い……からだ熱い……溶けちゃいそう……！」

「分かってるわ。もつと……もつと気持ちよくしてあげる…。」

それが絶頂へのサインだと知っている二人は、激しく唇を求め合つた。優衣も手錠を嵌められたまま、絢の首に腕を回す。急速に高まる快感を、愛撫とキスで加速させる。

「あたし……あ、あたし……あたし……!!」

熱いマグマが腰の奥で煮えたぎり、下半身に力が入る。絶頂はもう目の前。

その時——隣の部屋にいた愛莉が携帯を握りながら戻ってきた。

「じゃあね遊希さん！ そのことは絶対対、先輩と絢さんには秘密だからね……って、あああああつ！ 先輩がイキそうになつてるーっ!!」

「あ……愛莉ちゃん……ふああああつ！」

絢に楽しみを奪われた愛莉は、携帯を投げ捨て優衣に飛びついた。キスに割り込み、お留守になつていたクリトリスを擦り出す。

「ひいいああああ!! だ、だめ愛莉ちゃん! そこ、いきなりはダメえええ!!」

愛莉に対抗するように、絢も膣肉を掻き回した。内と外を同時に責められ、腰が狂つたように跳ね回る。

「イク……イッチャウ! もうダメ、イッチャイそ……うっ、きゅふううん!!」

「あは、先輩イッチャうんだ。いいよ。イクとこ、愛莉に見せて!」

「イキなさい、優衣、思いつきり!」

ふたりの指が速度を増す。堪らず伸ばした舌先に、二枚の舌が絡みつく。ざらりとした感触が、優衣の頭を真っ白に染め上げる。舌と膣と淫核で生まれた快感電流が、身体の中で暴れ狂う。

「はふうあああ! イク、イッチャウ! イッ……くうううううッ!!」

ピンと勃つた乳首を頂点に、優衣の身体が仰け反つた。強張つた内腿の間から、失禁したように透明の飛沫しぶきが迸る。

「すっごーい。優衣先輩、潮吹いちゃつた」

「ふあ、あ、や……やああ見ないで、いやああああああつ!!」

羞恥が、さらなる絶頂へと優衣を飛ばす。欲情にまみれた二人の眼に晒されながら、何

度も何度も、快感に痺れる腰をしゃくり上げた。

「はあ……はあ、はあはあ……は、あ……ああああ……」

快感の大波が、次第に引いていく。ベッドにだらしなく身体を投げ出すけれど、絶頂^{けい}が収まりきらずに腰が何度も小さく跳ね上がる。荒い呼吸も整えきれない。脚の内側は恥液でベトベト。満足に眼も開けられなくて確認できないけれど、お尻が微妙にひんやりしていて、シーツに大きな愛液の染みができているのは間違いない。

「可愛いわ、優衣……」

「あ……」

絢の指先が、白い小山の頂点で震える乳首を撫でる。それだけで、感電したように身体がピクンと小さく跳ねる。それを、愛莉が面白そうに見下ろしている。ものすごく恥ずかしいのに、後輩少女の唇が近づくと、それが欲しくなってそっと眼を閉じる。

でも、いつまで待ってもキスできなかった。じれったくなつて眼を開けると、愛莉は、優衣に覆い被さった状態で顔を蒼褪めさせていた。その視線の先は、優衣ではなく、無表情の絢。彼女は愛莉の携帯を拾い上げ、着信画面を持ち主に見せつけている。

「……さて、一段落したことだし……説明してもらいましょか、愛莉。遊希さんと何を話していたの？ 私と優衣に秘密にしなくちゃならないことって、どんなことかしら」

「え……えっと……あの、その……ねえ？」



「あはっ、やっぱいい。お尻まで垂れちゃってるじゃない。優衣ちゃんて、すーぐ濡れになっちゃうよねえ」

「いやいや、見ないで……言わないでえ……!!」

秘部に視線を感じて身悶えした。遊希に苛められるのは嬉しいけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。脚を閉じようにも、身体が竦んで力が入らない。それどころか彼女に右膝を持ち上げられ、大胆な開脚を強いられる。

「あは。優衣ちゃん、すごい格好。可愛いお尻の穴まで丸見えー」

「やだやだやだ! ゆ、遊希さんのバカッ! あ、あ……!!」

辱められ、秘裂が激しく蠢いた。失禁したかと焦るほど大量の淫蜜を吐き出す。遊希のレンズはその瞬間を逃さなかった。

「あは、優衣ちゃんのお漏らし♪ すっごおい、まだまだ溢れてくるう!」

股間で何度もフラッシュが瞬く。以前、何度も遊希の写真で見せられ脳裏に焼きついた自分の淫裂。爛れたように充血したあの濡れ肉壁が、また記録されている。

(や、ああああん! 見られてる……。と、撮られちゃってるよお……。!!)

ぎゅつと眼を閉じて羞恥に耐える。しかしそれは、むしろ視姦されている部分に意識を集中させるだけだった。シャッター音に反応し、感電したように内腿の筋が突っ張る。遊希も、はあはあと息を荒らげて撮影に熱中している。

一度は消した恥辱の記録。それを再び残すことの意味を、優衣だって痛いほど分かって

いる。それでも、また遊希と愛し合うために、これは必要な儀式だった。わだかまりや罪悪感を彼女の中に残すくらいなら、共犯者になって一緒に罪を背負えばいい。

「ああ可愛い……。優衣ちゃんの髪々ピクピク震えて……。あ、またおツユが零れたあ。やらしい……。クリちゃんも、ほら、こーんなにぷつくり膨らんで、気持ちよさそおう」

「やあああん！　そ、そんなに詳しく言わないで……。あんツ、はあああん！！」

遊希の羞恥責めに苦悶しながら、しかし苛められる快楽に溺れる。彼女の声に操られるように、中指で、硬くしこったクリトリスを夢中で擦る。

「あう、ん、く……。ツ、ふあう、あうっ！！」

声を抑えることができない。腰が勝手に動き出し、短いテンポでリズムを刻む。その様を、遊希があますところなく写真に焼きつける。彼女の視線とカメラのレンズが、まるで直接触れているかのように秘裂を愛撫し、優衣の身体を快感に狂わせる。

「あはあ……。優衣ちゃんのここ、とろとろ……。いやらしい匂い……」

遊希の指が、恥褻に溜まった蜜を掬い上げた。掠ったような接触到、優衣の腰が大きく跳ねる。彼女はその反応に眼を細め、指先を濡らす蜜を舌先で味見した。しかし全部は舐め取らず、たっぷり残ったそれを優衣の淫核に塗りつける。

「すごい……。もう、たまらない……！！」

「あああう！　ゆ、遊希さんツ……。ふあ、や、あああああツ！！」

優衣の自慰に割り込んだ遊希が、円を描くようにクリトリスを撫でる。しかも、ぱつく

り割れた秘裂にも舌を押しつけてきた。膣口周辺を、ねっとりとした感触が這い回る。勃起淫核と粘膜への同時攻撃で、優衣の口から悲鳴を絞り出す。

「ひいッ?! りよ、両方はダメッ……だめだめ、ヒッ……いやあああッ!」

恥裂と淫核を交互に責められ、もはやオナニーどころではなくなった。腰が上下にうねって躍る。ベッドを踏みつけるように両脚をばたつかせる。

「あん。優衣ちゃん、そんなに暴れないで……」

遊希の腰が顔を跨ぐ。ふと、荒くなった優衣の呼吸が甘酸っぱい匂いを嗅ぎつけた。快感で朦朧としながら、半ば無意識に彼女の股間に手を這わせる。彼女のお尻がピクンと跳ねた。その勢いにつられるように、ショートパンツの股間の隙間に指を突っ込んだ。

「あ……!」

遊希が小さな声を漏らす。彼女の股間に籠もるのは、淫靡な熱気。下着の底が、大量の水分を含んで重たそうに濡れている。

「ああ……優衣ちゃん……。あ、はああ……」

甘ったるい、遊希の匂いと喘ぎ声。我慢できなくなった優衣は、彼女のショートパンツを一気に引きずり下ろした。お尻の丸みに沿って剥ぎ取ると、すっかり濡れて色の変わった下着の底が目の前に現れる。強くなつた匂いに鼻孔を刺激された優衣は、ふらふらと引き寄せられるように、その魅惑的な布地にむしゃぶりついた。

「遊希さん……んむっ」

シルクの下着に染みた愛液を吸引すると、遊希のお尻が左右に揺れる。下着のゴムに沿って舌を這わせれば、今度は大きく上下に跳ねた。

「あんっ、優衣ちゃん……そこ、ああああん！」

歓喜の声を上げ、遊希が優衣の脚にしがみつく。しかし、ショーツパンツを膝までしか下ろしていないので、脚が開かず奥までキスできない。邪魔なそれを完全に脚から抜き取って、優衣は今度こそ思いきり遊希の下着に吸いついた。薄い布地越しに感じる淫裂の窪み。そこに、尖らせた舌先を抉り込む。

「あッ、すご……っ、あ……ふあッ……！」

瞬時に、遊希の肌が汗ばんだ。優衣の太腿に彼女の指が食い込む。二、三秒の間、腰を痙攣させていた彼女は、すぐ反撃に転じた。優衣の膣口に指を挿し込み、入り口付近を螺旋状に抉ってくすぐる。

「ひッ……いいい！ ゆ、遊希さんッ！ そこ、あつ、そこは……ン、あッ!!」

対抗しようとするけれど、身体が震えて思うように動けない。しかも、なおも繰り返し聞こえるシャッター音。ぱっくり開いた性器を写されているところを想像すると、快感と恥ずかしさで頭が真っ白になる。

「やだっ。遊希さん、やあああ！」

もちろん、優衣の拒否が言葉だけなのは彼女も知っている。膣口や淫唇を掻き回し、だらしなく恥蜜を垂れ流す様をカメラに収める。愛撫的には決して強い刺激じゃないのに、

優衣の性感が猛スピードで急上昇する。

「ひッ、あッ、んあああ！ あああうあつ！」

陰唇を震わされるたび、痺れるような快感に腰が躍る。上半身と下半身が、ばらばらに身悶えする。それでも優衣は、震える身体に鞭打って遊希のお尻にしがみついた。下着の底に唇をつける。すると、遊希が切なげな瞳でこちらを振り返った。

「お、お願い優衣ちゃん……直接……」

優衣は頷き、指を掛けて下着をずり下げた。遊希もお尻を振って、もどかしげにそれを感じ捨てる。完全にフリーになった彼女の性器は、多量の淫蜜で爛れたような紅色に輝いている。しかし優衣は、その淫靡な花びらを観察する間もなく舌で蜜を掬い取った。

「きゅふっ！ んふあつ！ あ、はああ……ン、んむっ！」

喘ぎながら、遊希も優衣の股間に吸いつく。ふたりは、互いの淫裂を無我夢中で食った。

「あぶっ……ゆ、遊希……さ……あふっ、んぶっ、ンぶふあああつ！」

「優衣ちゃん……優衣ちゃん……ん、ちゅ、ちゅぶぶっ！」

互いの腰を抱き寄せ、淫核を吸い、舌先で膣口を抉る。唇の周りをベタベタにして、陰唇の襞と舌を絡ませ合う。

「ふああんっ！ ゆ、優衣ちゃん、気持ちいい！ 腰……蕩けちゃいそう……！」

「あ、あたしも……遊希さん、もつと……もつとおお！」

激しい快感の痺れに、ふたつのお尻が暴れ回る。それを追い掛けるので精一杯で、優衣

も遊希も、撮影どころではなくなっていた。誰かに撮ってもらいたかったけど、それよりも、もう相手を気持ちよくすることしか考えられない。

「きゃッ……あう、あうん！ あ……あたし……ンああッ！」

遊希にクリトリスを激しく吸われ、全身が硬直するような快感が走った。爪先立ちになって腰を跳ね上げる。すかさず、吸引に痺れる淫核を遊希が舌先で細かく弾いた。

「りや、りやめっ！ 遊希さんダメダメ、そんなにしたら……イッ……ちやうッ!!」

「いいのよ……イカせてあげる……。ん、んぶっ、ちゅ、ちゅるるっ！」

遊希は優衣を絶頂に飛ばそうとして、クリトリスを集中的に責めまくる。ガクガクと腰が暴れて止まらない。身体が仰け反って、クンニを続けられない。それでも最後の抵抗とばかり、優衣は彼女の膣に指を突っ込んだ。

「ふああああう!!」

膣内の肉壁を擦ると、遊希が首を反らせて喘ぐ。しかしそれも一瞬。彼女も優衣の膣を掻き回しながら淫核を舌で転がした。

「ヒッ……ンッあああっ！ 遊希さん、遊希さん!!」

「優衣ちゃんすごいっ！ わ……わたしもイッちやうっ！」

指が膣をフルストロークで犯す。淫核を震わせる。音を立てて蜜を舐め取る。絶頂に向かつて、ふたり一緒に走り出す。

「イクッ！ 遊希さんあたしッ、もう……もう、イクイクああっイッ、くううッ！」



「わたしも優衣ちゃん！ からだ熱っ……と、飛んじやう、ふあああああつ！」

甲高い悲鳴が部屋の中で絡み合った。痙攣した内腿が相手の頬を挟み込む。柔らかで熱い肌を引き攣るのを感じながら、優衣と遊希は、さらなる高い絶頂へと飛ばされた。

「あああう、あああう！ ゆ、遊希さん、そんな舐めないで……ふあつ、あああつ!!」

「優衣ちゃん！ そ、そんな抉ったらまた……また、ンふあああああつ!!」

際限のない快感に苛まれ、ふたりは相手の身体にしがみつく。

「はあ……はあ……。ゆ、う、き……さん……あ、は……っ」

それでも、何度も跳ね上がる優衣の腰を這って、遊希がこちらに顔を向けた。何度も倒れそうになりながら、お腹に跨がり上体を起こす。

「あ、はあ……。優衣ちゃん、いい顔お……。おっぱい、ぴくぴくして……お口から、涎いっぱい垂らして……」

激しい絶頂に酔った笑みで、遊希が見下ろしてくる。どろりと蕩けた視界の中で、彼女がカメラを手にするのが見えるけど、もはや優衣には何もできない。為す術なくベッドに身体を投げ出し、絶頂の汗に光る裸身を、あますところなく写される。

「ゆ、遊希……さん……」

羞恥に喘ぎながら彼女の名を呼ぶ。返事の代わりにシャッターが鳴る。それに反応し、蠢く優衣の淫裂から、蜜が一筋、シートに零れた。

(あ……これも、気持ちいい……)

戸惑いながらの舌愛撫が、優衣に新鮮な悦びをもたらす。初めてのキスで大胆になれないながらも、なんとか優衣を感じさせようとする姿がいじらしい。愛おしくて、胸がいつぱいになって、優衣は堪らず彼女の口にかぶりつき、とろとろと唾液を流し込んだ。

「ん……あふつ。ゆ……優衣……優衣さ……あ……んっ、ん……んんっ！」

喘ぎながらも、コクコクと喉を鳴らして唾を飲み込む詩歩に、優衣の身体がカッと燃え上がった。本当はキスだけで終わりにしようと思っていた。けれど、彼女の蕩けた瞳に惹きつけられる。身体の中を炙る淫熱を抑えきれない。

「詩歩ちゃん、可愛い……。もっと気持ちよくしてあげる……」

「え？ ……きゃ!？」

詩歩が小さな悲鳴を上げる。優衣は彼女の身体を半回転させ、背中から抱き締めた。そしてセーラーカラーのシャツに手をつまみ、ブラの上から乳房を掌で包み込む。

「やつ……ゆ、優衣さん！ ……こんなところで、こんな………あっ」

「あら？ 詩歩ちゃんスポーツブラなんだ。そうよね、汗とかで服が透けるとこ、カメラさんに撮られたくないもんね。ちゃんんと考えてるんだ」

「え……これは別にそんなつもりじゃ……や、あっ！」

脱がせやすそうな下着が、優衣の暴走に拍車を掛けた。まだロケの途中で、こんな街中

のバスの中でする行為じゃないのは分かっている。なのに、彼女の可愛い声を聞きたい欲求に抗えない。なまじ同性相手の経験があるだけに、妙な自信が優衣を衝き動かす。

「いや……優衣さん……。あ……!!」

真ん丸な膨らみの中心を指先で擦ると、驚いた詩歩は身体を丸めようとした。しかし、優衣は彼女の敏感な部分を的確に捉え、簡単には逃がさない。何より、触る前からブラに浮かび上がる小さな蕾が、その微妙な段差の感触が、優衣の手を離してくれない。

「んふっ……分かるよ、詩歩ちゃん……。ほら……先っば、硬くなってる」

「そ、そんなこと……ありません……ふああああ!!」

事実を認めようとしないう詩歩の耳を、ちよつと強めに甘噛みした。彼女の身体が反射的に反るのを利用して、スポーツブラをたくし上げる。伸縮性のある素材の中に押し込まれていた膨らみが、解放に喜ぶように、ぷるんと揺れて現れた。

「ふふふっ、詩歩ちゃんのウソつき。ほら、こーんなにコリコリ……あはあ……」

「ヤッ、あっ……優衣さん……触っちゃ……んっ!!」

「だーめ。暴れないで……」

「でも……は、あん……はうっ、あああうんっ!!」

悶える詩歩の首筋を舐め上げる。言葉とは裏腹に、余計に悶えさせてしまうけど、その姿が可愛くて、もっと苛めたくなくなってしまふ。

（なんだろ、この気持ち……。ゾクゾクして、すっごく意地悪したくなって……。でも、と

つても愛おしい感じ……。みんな、あたしを責める時、こんな気分だったのかな……)

詩歩の喘ぎ声を聞いていると、優衣の身体も熱くなる。さつきから、股間の性愛器官が疼いて我慢できない。内腿を擦って紛らわしたいけど、脚の間には詩歩のお尻があつて、それも叶わない。切なさに、腰が自然にくねってしまう。やり場のない欲求の捌け口を、優衣は、理不尽にも詩歩の乳首にぶつけた。

「詩歩ちゃんのおっぱい、意外と大きい……着やせるタイプ？」

「そ、そんなの……そんなの分かんない……ひいッ！」

耳に息を吹き掛けながら乳首を捻り上げると、浮き上がった腿がピクピクと痙攣する。ふと、彼女の手が内腿の間に置かれているのが見えた。無意識なのか、それとも優衣に気づかれないようになのか。微妙に動く中指が、スカートの上から股間を押さえている。

「詩歩ちゃん、何してるの？」

「えっ……あつ！ み、見ちゃだめえ!!」

声を掛けて詩歩の注意を引く。その隙に、優衣の右手が彼女の下腹部を捉えた。詩歩が慌てて脚を閉じようとするけど、左脚を彼女の左腿に引っ掛けて、それを阻止。さらに指の腹で乳首を転がすと、彼女は感電したように全身を突っ張らせた。抵抗が弱くなったところを狙って、数本の指で彼女の中心をなぞり上げる。

「う……あつ。だめ……っ。そ、そんなところ……触っちゃ……や、あ……あッ！」

「んふっ……どうして？ 詩歩ちゃんのこと、とつても熱くなってるのに……」

ひと撫でて感じる淫靡な熱気。厚手の布地でも遮ることのできない彼女の欲情に、優衣の中で眠っていた嗜虐の悦びが開花していく。耳朶をねっとり舐めながら、熱い息で囁きかける。

「辛いんでしょう？ ……触って欲しいんでしょう？」

「ンふあああう！ だめ、だめッ……だめええ………」

口では拒否しながら、詩歩は、後頭部を優衣の肩にぐったりと預けた。優衣が爪の先で太腿をくすぐると、彼女のお尻が強張って跳ねる。その反応を楽しみながら、焦らすようにゆっくりと、詩歩の中心に向かって指を進める。しかし、到達したと思ったそこにあつた感触は、下着にしては違和感がある。

「……あ、これキュロットか」

優衣はルートを変え、お腹側から責めた。ホックとジッパーを外してキュロットを緩める。純白のパンツが視界に入った。それが、一瞬の躊躇を生む。場所を考えるなら、これ以上はやめておくべき。でも、こんなに喘いでいる彼女を途中で放り出すのも可哀想。残り時間を逆算し、まだ大丈夫と判断した優衣は、思いきって指を進めた。小さなおへそを予告のように軽く撫で、下着のゴムをくぐり抜ける。

「ハッ……あッ!!」

詩歩がカッと目を見開いた。最初に触れたのは、意外としつかり生え揃った恥毛。その先に感じる淫熱の誘いに抗いきれず、優衣は彼女の中心へと一気に侵攻した。

「あ、あ……ああああっ!!」

凶らずも、滑り込んだ指先が淫核を擦った。詩歩の身体が一瞬、棒のように硬直する。軽く達してしまったようだ。もちろん、このくらいでは優衣の方が我慢できない。魚のように痙攣する詩歩を左腕で抱きかかえ、淫裂に指を潜り込ませる。

「はあ……」

その瞬間、感嘆の溜め息が漏れた。とろりとした熱い泉。蕩けるような陰唇の肉壁。心地よさに包まれて、優衣の胸が熱くなる。自分のあそこも、まるで誰かに触られているかのように、鋭い快感で貫かれる。

「すごい……詩歩ちゃんのここ……熱くて、柔らかくて……気持ちいい……。それに、いっぱい濡れて……あはあ……濡れちゃいそう……」

「優衣さ……ゆ、優衣……優衣さん……あ、あ……あっ!!」

淫蜜の海を泳ぐように指を動かすと、詩歩は泣きそうな声で喘いだ。何度も優衣の名前を呼んでは、バスのシートを掻き巻る。その手を握ってあげたいけど、あいにく優衣の両手も忙しい。代わりに、彼女の耳朶をねっとり舐める。

「ひいいいっ! そ、それ、そこダメ、ふぁ、あッ、ヒッ……ひいいいッ!!」

耳と胸と股間と。一度に刺激を受けた詩歩の甲高い悲鳴が迸った。

「あん、詩歩ちゃん、静かに。バスの外には人がいっぱいいるのよ?」

慌てて掌で口を塞ぐ詩歩。彼女に言い聞かせながら、優衣もロケ中であることを忘れか

不意に、優衣の股間に衝撃が走った。暴れ回る詩歩の脚が、恥裂の部分を擦り上げている。今日は愛撫する側と我慢していたせいで、突然の刺激に対応できない。溜め込んだ欲求を吐き出すように、腰を上下に振って、彼女の腿に股間を擦りつけてしまう。

「あ……ああっ、詩歩ちゃん凄いつ！ んふあつ、あう、ンあつ、ああああうつ！」

「優衣さん、優衣さんっ！ ン、きやう、あつ、んふあああああつ！」

絡み合う舌で頭が痺れる。詩歩を責めているはずの指先さえ、性感帯になったように気持ちいい。二人ともお尻を卑猥にくねらせ、快感の頂点へ昇り始める。

「だめっ！ わ……わたしダメになる……お、おかしくなるっ……なっちゃいますっ！」

「いいよ、ダメになって詩歩ちゃん！ あ、あたしも……あたしもおっ！」

追い詰められた詩歩の脚が、優衣の恥裂に食い込んだ。弾みで、優衣の指が彼女の淫核を根元から擦り上げる。

「飛ぶ！ 飛んじやう！ わたし、優衣さん飛んじやう！ ひッ、いあああッ!!」

「あたしも、あたしもイッチやう！ イク、いいいいくうううッ!!」

優衣の股間が恥蜜を吐き出し、下着を濡らした。詩歩も大量に漏らしてシートを汚す。

「あつ、ふっ、はふ……う、はっ……」

詩歩の呼吸が乱れて元に戻らない。それは優衣も同じ。たったあれだけの刺激で達してしまい、気だるさで起き上がることもできない。それでも、ふたりの眼が合うと、どちらからともなく唇を寄せた。絶頂の余韻に浸る軽い口づけではなく、再び始まってしまいそ



うな舌を絡める激しいキス。

「あ……はあ……。嬉しい……。わたし、優衣さんとキス、してる……」

「詩歩ちゃん……」

唾液の糸を引きながら、詩歩は心から幸せそうに微笑んだ。その瞳から流れ落ちる一粒の涙に、優衣は、チクリと、胸を痛めた。

その後のロケで、優衣と詩歩はすっかり打ち解けた様子を見せた。ディレクターに、前半を撮り直したいくらいだと言わせるほどに。ただ、お喋りが弾みすぎて、今度は予定の時間を大幅に遅らせる羽目になってしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!